第3分科会「患者・市民への医学情報の提供」に参加して

福井 堅一*

札幌医科大学附属図書館

医学図書館の総会に参加した中で、今回は分科会を通して一つお土産を持って帰ることが出来てよかったと思っています。総会の場で全国から集まって来てこそコミュニケーションが取れる内容の事柄もたくさんあると思いますので、今後が楽しみかなと考えています。

私が、第3分科会「患者・市民への医学情報の提供」に参加したのは、北海道病院ライブラリー研究会の会員であり、道内の病院図書室の情報に触れる機会が多い中、道内の病院でも患者さんのための図書室を開設する病院が出てきて、最近話題になることも多かったこと。また、最近の病院の傾向で、患者さんのための図書室を開設するところが全国的に増えつつあることもあり、先進の患者図書館ではどう対応しているのか知りたかったこと。さらに、大学図書館というよりは大学として、もしかしたら近い将来開設の必要性に迫られるのではないかと思ったこと等の理由で、今回はちょうどよい機会となりました。

話を伺うだけで恐縮ではあったのですが、先進の病院と大学、北米事情のお話が聞けるということで楽しみに参加させていただきました。

京都南病院図書室の山室眞知子氏の“「病気の本」を超えた医学情報提供事例から”は1970年からすでに入院患者へも貸し出しを開始し、1971年からは健康医学図書に限定しているとは言え、患者教育を目的とした医学書の提供、さらに1997年からは医学専門書を公開しています。患者さんのプライバシーの尊重、資料の具体的な提供方法、患者さんからの質問についての対応、専門書の利用案内等すでにきちんとしたマニュアルが出来ていて、さまざまな状況におかれてもすぐに対応できる体制にあるのはすばらしいと感心いたしました。図書委員会を設けてきちっと論議した上で、病院として患者さんに提供するためには何が必要で、どう提供したらいいのか、論議した内容も含めて具体的な言葉で説明してい

ただいて、患者さんに情報を提供していくために何が必要なのか参考になることが非常に多い内容でした。今では流行というわけではありませんが、患者用図書室は増加傾向にあることは確かですが、1970年代ではまだ、患者さんへ医学情報を提供することなど考えられない時代でしたので、私が知らなかっただけでも知れませんが驚きの中で拝聴させていただきました。

東京女子医科大学図書館の桑原文子氏の“「からだ情報館」の計画、準備、現状、将来”は患者様という言葉がたくさん使ってらっしゃったのが印象的ですが、患者様だけでなく地域住民の方々にも開放されているというところがちょっと驚きでした。基本的にはどなたがきてもいいというスタンスが開放という意味合いをより強くしているのかなと思います。大学の医学図書館とどうかかわっているのか。また、図書館とどう折り合いをつけて運営しているのか興味があったのですが、大学というよりは、病院全体としての取り組みとなっていて、今のところ大学の図書館とは別な組織として患者図書室が存在しているという状況のようです。ただし、今後医学情報を提供するということでは、図書館も重要な情報資源であり、いずれは連携を取っていく必要があると考えているようです。「病院の中に患者が学習するための“場”を提供する。」というサービスを目的とし、1年経過してすでに手探りの状態から脱し、目標を持って進められています。「からだ情報館」を設置し軌道に乗せるまでの苦労なども話の中で伝わってきて、大変だったのだらうなあと感じました。同じ大学として参考にさせていただけるところが多々あり、失礼な言い方かもしれませんが、今後大変注目させていただきたいと思います。

慶應義塾大学医学メディアセンターの酒井由紀子氏の北米の消費者健康サービスについては、情報を細かく収集し、参考に見せていただいた資料もきちんと整理されていて大変見やすいものでした。年代にそって説明をいただいたのですが、私の不得手な分野でもあり、歴史の勉強をあらためてさせられ、いや、させていただきました。70年代「患者の権利宣言」（アメリカ病院協会から

*Kenichi FUKUI : 〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目。

(2004年7月15日 受理)

だされた権利章典のこと）があり、最初の項目に「患者は、思いやりのある〔人格を〕尊重したケアを受ける権利がある。」と1973年にはもうこういう宣言が出されていたのだと改めて関心しました。さらに、病院評価機関の「認定マニュアル」では、民間団体である現在の医療施設認定合同審査会（JCAHO）がだしたマニュアルで、この中に教育を受ける権利があるとうたわれている。北米は政府関係だけでなく消費者も必要と思えば、各プロジェクトにお金を出す国であるだけに、消費者の意識も高く能動的であると感じます。現在は、図書館によるサー

ビス、図書館以外のサービス、Webによる豊富な健康情報、実態調査や評価が進んでいます。何をおいてもインターネットの普及によるWebを使っのサービスが一番効果を高めたのではないかと思います。お話の中で、2000年に医療ミスで44,000人が亡くなられているというのは驚きました。今後はこれらさまざまな情報をいかに融合させて提供していくかということのようです。

今回お話いただいた内容は、今後参考になる事柄がたいへん多く、充実した分科会でありました。

第3分科会 「患者・市民への医学情報の提供」

話題提供者：桑原文子（東女）、山室真知子（京都南病院）、酒井由紀子（慶應）

司 会：奈良岡功（自治）